The Journal of the Department of Social Welfare,
Kansai University of Social Welfare Vol.*17-1, 2013.9*
pp.*17 − 26*

原　著

家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内特性に対する社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキルの効果

The effect of social work skills of social workers to the family systems of the elderly abuse

一瀬　貴子

要約：本稿の主な目的は，家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能や構造の変容に対して，社会福祉士が活用する効果的なソーシャルワーク実践スキルを明らかにすることである．

調査方法は，倫理的配慮を行った上で全国の地域包括支援センター 435 箇所に配属されている社会福祉士 435 名を対象とし，自記式質問紙を作成し，郵送調査を行った．有効回答は 120 名であった．

家族システム内の機能や構造の変容に対して，社会福祉士が活用する効果的なソーシャルワーク実践スキルを明らかにするために，社会福祉士が介入した後の家族システム内特性の改善度を従属変数，社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキルの活用頻度を独立変数とする重回帰分析を行った．

その結果，家族システム内特性の改善の第 1 因子である『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子には，『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』が有意な正の規定力を示した．家族システム内特性の改善の第 2 因子である『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子には，『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』が有意な正の規定力を示した．家族システム内特性の改善の第 3 因子である『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子には，『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』と『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』が正の規定力を示した．

これらの結果より，『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』は，『高齢者と養護者の交流パターンの改善』や『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』や『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』につながるソーシャルワーク実践スキルであることが明らかとなった．

相互作用パターンの変容方法を家族成員に伝えることで，家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性が改善することから，家族システムズアプローチに基づいたファミリーソーシャルワークを実践することは効果的であるといえる．

Key Words：家庭内高齢者虐待，ファミリーソーシャルワーク，家族システム内特性，社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキル

1．緒言

厚生労働省の調査では，2011 年度の高齢者虐待発生事例件数は 16,750 件であり，そのうち，16,599 件が家庭内高齢者虐待であると報告されている．高齢者虐待の種類では，①身体的虐待（64.5％），②心理的虐待（37.4％），③経済的虐待（25.0％），④介護･世話の放棄･放任（24.8％）が多い．また，家庭内高齢者虐待の加害者は，①被害高齢者の息子（40.7％），②被害高齢者の夫（17.5％）が多い[1)]．

2013 年 4 月 8 日受付／ 2013 年 7 月 17 日受理
Takako ISSE
関西福祉大学　社会福祉学部

介入方法に関する研究[2)－11)]では，虐待発生のリスク要因として，①高齢者のパーソナリティ要因（年齢・性別・居住地域・生活自立度・認知症の有無と程度・意思疎通能力・社会的行動力・性格・経済状況・虐待を受けていることの自覚度・性別役割分業意識），②養護者のパーソナリティ要因（性別・年齢・続柄・介護役割・介護期間・性格・病歴・介護動機・介護意欲・介護継続意思・病識・虐待の自覚度・経済状態・居住状態・社会的支援），③家族の特性（過去の家族関係・同居形態・親族や友人との交流頻度），④文化に関する要因（地域風土）が明らかとなっている．

同居家族による虐待が多いというデータより，筆者は，

家庭内高齢者虐待の背景を理解する上で家族の全体像を理解することが重要であり，特に家族集団内の力動を分析視点として取り入れた研究を実施することが，被虐待高齢者にとっての安定した生活の再構築や養護者の抱える課題への支援方法の模索につながるのではないかと考えている．

家族集団内の力動を分析するうえで有効な理論のひとつにマレー・ボーエンの家族システムズ論がある[12]．ボーエンの家族システムズ論は，①原家族から伝承された家族独自の情動システムの影響を考慮に入れつつ，自己分化の度合いが低いクライエントが抱える機能障害を分析できる点，②クライエントが属している核家族内の力動を，三角形化の過程に焦点を当てて分析できる点から，家庭内において高齢者虐待が発生する原因を，家族システム論的見地から分析するうえで，有効な理論であると筆者は考える．

筆者は，この理論の考え方をとり入れながら、家庭内高齢者虐待が発生している家族集団の家族機能的適応能力と虐待発生頻度との関連について検討し，①家族機能的適応能力（家族凝集性，家族内ストレス対処能力，虐待に対する家族成員の認知的評価）の低さが虐待発生頻度に影響を及ぼすこと，②家族システム内の家族成員の機能上の位置や情緒分離度，三角関係，原家族からの情動システムの伝承，家族成員間の交流パターンの矛盾増幅ループ，家族サブシステム間の拡散した境界という家族特性が，虐待発生の背景にあることを明らかにした[13]．

また，家族集団の力動を説明する上で参考となる理論として,「家族間暴力は,加害者の個人的適応のみならず,家族の機能的適応力によって生じる」とする『ストレッサーへの二段階適応モデル』がある．井上[14]は,「虐待問題は，加害者の個人的特性によって宿命的に発生するとは考えず，たとえそのような個人が家族内に存在しても，家族システムのあり方やその外部環境との関わり方によって，虐待の発生は抑制しうるというのが，このモデルの核心である」と述べている．

家庭内高齢者虐待発生事例に対する介入モデルについては，社団法人日本社会福祉士会虐待対応ソーシャルワークモデル研究会[15]が提唱している「虐待対応ソーシャルワークモデル」がある．しかし，これには，ファミリーソーシャルワークの視点に立ったマネジメントの実施方法が具体的に示されていない．家庭内高齢者虐待発生事例に対するソーシャルワーク実践を具体的に理解し，用いることが出来る技能を獲得する研修プログラムを構築していくためには，虐待の発生頻度を軽減するのに効果的なソーシャルワーク実践スキルを明らかにし，社会福祉士の専門的判断に基づいて実践出来るように教育していくことが必要である．

本稿では，家庭内高齢者虐待が生じている家族システムの機能的適応能力の向上を図る介入方法を模索するため，家族内構造や情緒的交流パターンの変容を図るソーシャルワーク実践スキルが，どの程度効果を発揮しているのかを探りたい．本稿の主な目的は，家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能や構造の変容に対して，社会福祉士が活用する効果的なソーシャルワーク実践スキルを明らかにすることである．

本稿における仮説は次のとおりである．被虐待高齢者や虐待をする養護者以外の家族成員も含む家族システム内の，虐待発生に対する認知的評価の変容や，被虐待高齢者や虐待する養護者とその他の家族成員とのコミュニケーションパターンの変容を促すソーシャルワーク実践スキルは，家族の適応性（介護の意思決定に対する家族間の勢力関係・公的サービスや援助職の介入への家族成員の抵抗感・介護家族の公的サービスの利用状況・家族内の介護役割配分状況・虐待する養護者の感情表出に対する家族成員の情緒的･手段的支持）や家族内凝集性（介護に対する家族のまとまり具合）の改善に対して，正の規定力を示すのではないか．本稿では，以上の仮説に基づき，ファミリーソーシャルワークに基づくソーシャルワーク実践スキルが，高齢者や養護者や家族成員の状況に及ぼす影響について検討したいと考える．

仮説を検証していくうえでの分析手順は以下のとおりである．まず，本稿で取り上げた社会福祉士が活用しているソーシャルワーク実践スキル（35 項目）の因子分析を行う．次に，社会福祉士が介入した後の家族システム内特性の改善（15 項目）の因子分析を行う．そして，それぞれの因子分析結果より抽出された，ソーシャルワーク実践スキルに関する因子と家族システム内特性の改善に関する因子との相関分析を行い，有意な相関関係がみられたものについて，社会福祉士の介入後の家族システム内特性の改善に関する因子を従属変数，社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキルに関する因子を独立変数とした重回帰分析を行う．このうち，社会福祉士が活用しているソーシャルワーク実践スキルの因子分析の結果については，一瀬[16]で報告しているところであるが，本稿において仮説の検証をするための分析

において重要な部分となるため，再度掲載している．一瀬[16]では，社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキルの構造を明らかにする段階でとどまっているが，本稿では，それを用いて，家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能や構造の改善に対する影響について分析をさらに進めているため，その結果を報告する．

２．調査方法

（１）調査実施方法

全国の地域包括支援センター 435 箇所（札幌市・青森県（6 市 15 町村）・佐渡市・宮城県栗原市・仙台市・郡山市・大和市・石川県志賀町・福島県須賀川市・流山市・東京都（港区・足立区・町田市・北区・多摩市）・千葉県松戸市・多賀城市・豊田市・広島市・福山市・呉市・宝塚市・桑名市・高松市・愛媛県（10 市 9 町）・福岡市・北九州市・熊本市・鹿児島市の社会福祉士 435 名を対象とし，自記式質問紙を作成し，郵送調査を行った．まず，紙面にて研究目的及び調査結果の取り扱いについて詳細に説明し，それに同意した調査対象者のみが無記名（機関名も含む）かつ密封して返送する方法をとることにより，倫理的配慮を行った．

地域包括支援センターが創設された平成 18 年 4 月 1 日から，本調査実施前の時点である平成 20 年 3 月 1 日までの期間において，家庭内高齢者虐待事例を扱った経験のある社会福祉士 120 名の回答を有効回答とした．調査期間は，平成 20 年 3 月 14 日～ 3 月 28 日であった．

（２）測定指標

１）ソーシャルワーク実践スキルの評価指標

O`hara[17]らは，既存研究の結果をもとに，ソーシャルワーク実践スキルに関する 75 項目を選定し，社会福祉学を専攻する大学院生を対象とした調査を実施して 33 項目からなるソーシャルワーク実践評価指標を開発している．この指標は，①治療的，②サポート，③援助計画・評価，④ケースマネジメントの 4 要素から成っている．この研究では，ソーシャルワーク実践スキルを「ソーシャルワーカーが行う意図的な援助活動全般」と定義し，ソーシャルワーカーの能力ではなく，スキルの活用頻度を測定する指標となっており，具体的に細分化されているのが特徴である．

福島[18]は，O`hara[17]らの指標を参照とし，さらに精神障害者地域生活支援センターのソーシャルワーカー 10 名に対するプレ調査の結果をもとに修正した 37 項目からなるソーシャルワーク実践スキル評価指標を作成している．そして，精神障害者地域生活支援センターに所属する精神保健福祉士 267 名を調査対象とし，精神障害者地域生活支援センターの利用者に対するソーシャルワーク実践スキルの活用頻度の実態把握を行っている．因子分析の結果，①問題予防や課題解決のスキル群，②信頼関係を築くスキル群，③対人関係技能や自己評価を高めるスキル群，④ケースマネジメントのスキル群の 4 つから構成されていることを明らかにしている．

福島[18]が開発した指標は，利用者個人に対するスキルか，関係機関との連携を図るスキルが中心となっている．そこで，筆者は，家族病理の多世代伝達過程に焦点をあてたボーエンの家族システムズ論や，家族内構造に焦点を当てたミニューチンの家族構造療法などの理論を基盤とし，被虐待高齢者や虐待をする養護者以外の家族成員も含む家族システム内の認知的評価の変容や構造の変容を図るソーシャルワーク実践スキルに絞った 30 項目を選定した評価指標を用いて，社会福祉士 25 名を対象としたプレ調査を実施した．

本調査では，プレ調査で用いた家族システム論を理論的基盤とするソーシャルワーク実践スキル 30 項目のうち活用頻度が高かった 21 項目と，福島[18]が開発した指標 37 項目のうち，①クライエント個人に対して問題予防や課題解決のためのスキル，②クライエント個人との信頼関係を築くためのスキル，③ケースマネジメントのスキルを参照とし，被虐待高齢者個人や，養護者個人を対象としたソーシャルワーク実践スキル 14 項目を合わせた 35 項目を評価指標とし，「4．よくそうしていた」から「1．全くしなかった」の 4 件法で測定した．

２）社会福祉士介入後の家族システム特性の変化に関する評価指標

本稿では，家庭内高齢者虐待が発生している事例の，社会福祉士が介入する後の家族システム内機能や構造について，「本事例は，（社会福祉士の）介入によって，いかなる変化がみられましたか」という質問に対して，仮説的に、①高齢者や虐待する養護者やその他の家族成員の，虐待が発生していることに対する認知的評価（4 項目），②高齢者と虐待する養護者の交流パターン（3 項目），③虐待する養護者が育った家族における価値観に縛られる様子（1 項目），④家族成員の適応性や凝集性（5 項目），⑤公的サービスの利用状況やそれに対する抵抗感（2 項目）という 15 項目について，それぞれの項目に対する改善度について，「5．改善した」「4．どちらかといえば改善に向かっている」「3．変化なし」「2．どち

らかといえば悪化している」「1．悪化している」「0．判定不能」の６段階評価を行った．

３．調査結果および考察

（１）有効回答者の基本的属性

有効回答者120名の性別は，女性（53.8％），男性（46.2％）であり，相談援助実務年数は，①１年以上４年未満（41.8％），②４年以上10年未満（25.5％）で，平均実務年数は7.12 ± 6.67年であった．最終学歴は大学卒（72.9％）がもっとも多く，社会福祉専攻が57.8％と多かった．

（２）家庭内高齢者虐待の実態

家庭内で発生している高齢者虐待の発生比率を種類別にみると，①身体的虐待（67.5％），②経済的虐待（46.7％），③心理的虐待（45.0％），④介護放任・世話の放棄（40.8％），⑤性的虐待（ 1.7％）という順になっている．

家庭内高齢者虐待の被害者となっている高齢者の性別は，女性（85.0％）のほうが多く，年齢は，①80歳代（50.0％），②70歳代（38.6％）が多い．要介護度は，①要介護３（15.0％），②要介護１（14.2％），③要介護２（12.5％）が多い．介護保険制度の利用未申請のケースが9.2％あることも見逃せない．認知症高齢者の日常生活自立度については，①Ⅱ（26.1％），②認知症状なし（22.6％），③Ⅰ（20.9％），③Ⅲ（20.9％）が多い．被虐待高齢者が，養護者から虐待されていることを認知している比率については，①自覚がある（58.3％），②自覚なし（41.7％）であり，虐待されていると認知しながらも，養護者との在宅生活を継続している様子がうかがえる．

虐待を行っている養護者の性別は，男性（75.2％）のほうが多く，年齢は，①50歳代（36.9％），②40歳代（21.4％），③60歳代（11.7％）が多い．虐待を行っている養護者の続柄は，①被害高齢者の息子（48.7％），②被害高齢者の配偶者（23.5％），③被害高齢者の娘（10.9％）が多い．介護期間は，①２年以上５年未満（48.3％），②１年以上２年未満（22.4％），③１年未満（13.8％）が多い．

養護者が，「高齢者に対して虐待を行っている」という自覚がないのが54.2％，「虐待を行っている」という自覚があるのは45.8％である．養護者以外の家族や親族の，高齢者虐待発生状況への認知度は，①虐待とは認知していなかった（33.9％），②虐待と認知し，虐待する養護者にやめさせようとしていた（23.2％），③（SWが）確認できなかった（22.3％），④虐待と認知していたが，養護者に虐待をやめさせようと働きかけることはしていなかった（20.5％）という結果であった．

（３）ソーシャルワーク実践スキル（35項目）の因子分析結果

本稿では，家庭内高齢者虐待が発生している事例に対して社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキルの構成要素を検討するために，因子分析を行った．因子抽出は主因子法，回転はバリマックス回転を用いた．結果を表１に示す．因子の数は固有値１以上のものを採用し，６因子とした．６因子による累積寄与率は61.2％であり，因子負荷量が0.5以上の項目を採用し各因子の解釈を行った．また，因子分析の結果見出した６因子についての内的一貫性を検討するため，Cron-bachの α 信頼係数を算出した．

第１因子は「虐待する養護者との信頼関係を築くために共感を示した」「虐待する養護者をよく理解していることを伝えるために，相手の考えや感情などを反映したりした」「養護者とストレスを解消する方法をともに考えた」「養護者の埋もれた感情の表出を助けるために優しく質問した」「援助関係の中で虐待する養護者があるがままに受け入れられていると感じるようにした」「養護者のもつ長所（強い責任感など）や資源の状況をアセスメントした」など14項目から構成され，『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』と命名した（α = .961）．

第２因子は，「虐待を生み出す原因を，被虐待高齢者と虐待する養護者の会話パターンや行動を分析することで明らかにしようとした」「虐待を生み出す原因を，被虐待高齢者や虐待する養護者とその他の家族成員との会話パターンや行動を分析することで明らかにしようとした」「被虐待高齢者に対して，虐待する養護者の会話パターンや行動の中で変容させて欲しいと思うことを聞いた」「家族成員のストレスに対する反応の仕方が，同時にストレスを持続させる結果となっていることを理解できるように仕向けた」「虐待する養護者や家族が新たな問題発生の危険のある状況を予測できるよう手助けした」「虐待が発生するのは，どのような場面であるのか，どのような理由が背景にあるのかという点について，養護者および被虐待高齢者それぞれの認識度合いを確かめた」という６項目から構成され，『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』と命名した（α = .848）．

第３因子は，「自分の問題行動を処理したりコントロールしたりする方法を虐待する養護者以外の家族に伝え

た」「他者と会話するときのコツを虐待する養護者以外の家族成員とともに考えた」「養護者が被虐待高齢者に対して虐待をするのは，どのような場面であるのか，どのような理由があるのかという点について，虐待する養護者以外の家族成員の認識度合いを確かめた」「被虐待高齢者の身体的・心理的症状や過去の人間関係が虐待の原因だと考えるのではなく，介護家族の成員間の感情的雰囲気が問題であると考えるように仕向けた」「被虐待高齢者やその他の家族成員と会話をする時のコツを養護者とともに考えた」「養護者に対して，その他の家族成員の会話パターンや行動の中で変容させてほしいと思うことをきいた」という 6 項目から構成され，『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』と命名した（α = .815）.

第 4 因子は「虐待する養護者・被虐待高齢者およびその他の家族成員それぞれにとって問題が解決した状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた」「問題が解決した状態を目指すためにどのような資源や対処をとればよいと考えるのかを虐待する養護者・被虐待高齢者およびその他の家族成員とともに考えた」の 2 項目から構成され，『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』と命名した（α = .747）.

第 5 因子は「虐待する養護者が育った家族における人間関係や価値観が，今抱いている価値観や行動に影響を及ぼしていることを理解させた」「虐待する養護者と情緒的に過度に密着がある家族成員や親族と，適切な情緒的距離をとる方法をともに考えた」の 2 項目から構成され，『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』と命名した（α = .700）.

第 6 因子は「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して，賞賛した」である.

ソーシャルワーク実践スキルの活用頻度の平均スコアは，第 1 因子『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』（平均スコア 2.68），第 6 因子「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して、賞賛した」（平均スコア .267），第 4 因子『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』（平均スコア 2.56），第 2 因子『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』（平均スコア 2.43）が高い．この結果より，第 1 因子に含まれるソーシャルワーク実践スキルがもっとも多く用いられているといえる.

（4）社会福祉士の介入後の家族システム内特性の改善

1）社会福祉士の介入による家族システム内特性の改善度の評価時期

評価の時期は，1 年後が多い．社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの活用によって，①社会福祉士の介入によって，虐待は発生しなくなった（34.8％），②虐待は継続しているものの減少した（20.4％）が多い．その他としては，①被虐待高齢者が緊急避難的に施設入所している（20.6％），②被虐待高齢者の死亡により，援助が終結（ 7.5％）が多い.

2）社会福祉士の介入後の家族システム内特性の改善の因子分析結果

本稿では，家庭内高齢者虐待が発生している事例に対して社会福祉士がソーシャルワーク実践スキルを活用して介入した後の家族システム内特性の改善状況に関する 15 項目の構成要素を検討するために，因子分析を行った．因子分析に先立ち，評価尺度中の「0. 判定不能」という回答は欠損値として扱った. 因子抽出は主因子法，回転はバリマックス回転を用いた．結果を表 2 に示す．因子の数は固有値 1 以上のものを採用し，4 因子とした．4 因子による累積寄与率は 62.3％であり，因子負荷量が 0.5 以上の項目を採用し各因子の解釈を行った．また，因子分析の結果見出した 4 因子についての内的一貫性を検討するため，Cron-bach の α 信頼係数を算出した.

第 1 因子は，「高齢者と虐待する養護者のコミュニケーションの改善」「虐待する養護者の感情表出に対する家族成員の情緒的支持の改善」「家族成員間のコミュニケーションパターンの改善」「虐待する養護者が育った家族における価値観に縛られる様子の改善」「虐待する養護者と高齢者の過度な情緒的結びつきの改善」「介護の意思決定に対する家族成員間の勢力関係の改善」「虐待する養護者の，虐待をしていることに対する認知の改善」という 7 項目からなり，『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子と命名した（α = .851）.

第 2 因子は，「虐待する養護者以外の家族成員の，虐待に対する認知の改善」「虐待発生原因についての家族成員の共有認識度の改善」「介護に対する家族成員のまとまり具合の改善」「高齢者の，虐待を受けていることに対する認知の改善」「家族内の介護役割配分状況の改善」の 5 項目からなり，『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子と命名した（α = .830）.

第 3 因子は，「介護家族の公的サービスの利用状況の改善」「公的サービスや援助職の介入への家族成員の抵抗感の改善」という 2 項目からなり，『公的サービスの

表１　社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキルに関する因子分析結果

社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキル	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子	第６因子	共通性
①養護者と信頼関係を築くために共感を示した	.850	.143	−.030	.081	.022	.092	.760
②養護者をよく理解していることを示すため，相手の考えや感情を反映した	.839	.149	.023	.060	.109	−.035	.743
③養護者とストレスを解消する方法をともに考えた	.820	.211	.043	.081	.144	−.060	.749
④養護者の埋もれた感情表出を助けるため優しく質問した	.820	.176	.038	.057	−.004	.055	.711
⑤養護者があるがままに受け入れられていると感じられるようにした	.781	.156	.152	.186	.070	.065	.701
⑥養護者のもつ長所（強い責任感など）や資源の状況をアセスメントした	.768	.096	.157	.030	.035	.062	.629
⑦虐待発生の繰り返しを防ぐ方法を養護者に提案した	.767	.219	.022	.038	.194	.003	.676
⑧養護者に対して情緒的サポートをした	.766	.229	.155	.019	.166	−.176	.722
⑨養護者とともに援助目標を定めた	.753	.017	.160	.057	.121	.203	.652
⑩他施設・機関のサービスを具体的に紹介した	.746	−.006	.036	−.042	.098	.111	.581
⑪養護者がうまく決断できるよう手助けした	.745	.125	.141	.284	.015	−.089	.679
⑫養護者の抱える問題を具体的な言葉で表現した	.717	.199	.067	−.004	.058	.201	.602
⑬養護者が自信をつけるため養護者が成し遂げてきたことを指摘した	.686	.135	.327	.098	−.049	.142	.628
⑭養護者に対して，高齢者の会話形態で変容して欲しいことを聞いた	.520	.505	.177	.163	.220	−.001	.630
①虐待の原因を，高齢者と養護者の会話パターンや行動を分析することで明らかにした	.168	.831	.028	.152	.201	.110	.795
②虐待の原因を，高齢者や養護者と，その他の家族成員との会話パターンや行動を分析することで明らかにした	.194	.647	.087	.112	.175	.087	.515
③高齢者に対して，養護者の会話形態で変容して欲しいことを聞いた	−.030	.638	.378	.359	.057	−.113	.696
④家族成員のストレス反応の仕方が，ストレスを持続させていることを理解できるようにした（問題偽解決パターンの認知の推進）	.339	.558	.336	.038	.263	−.115	.623
⑤養護者や家族が新たな問題発生を予測するよう助けた	.285	.523	.397	.168	.199	.045	.582
⑥虐待発生場面・理由に関する養護者や高齢者の認識を確かめた	.222	.503	.204	−.031	−.033	.459	.547
①問題行動の処理方法を養護者以外の家族成員に伝えた（行動変容の推進）	.001	.175	.700	.028	.359	.129	.667
②他者と会話するコツを養護者以外の家族成員に伝えた（コミュニケーションパターンの変容）	.145	.201	.695	.074	.278	−.054	.630
③虐待原因について，家族成員の認知度合いを確かめた	−.135	.022	.560	.321	.032	.231	.489
④高齢者の身体的・心理的症状や過去の人間関係が虐待の原因だと考えるのではなく，介護家族の感情的雰囲気が問題であると考えるように仕向けた（問題の再定義）	.176	.438	.523	.311	.184	−.284	.708
⑤高齢者や家族成員と会話する時のコツを，養護者とともに考えた	.392	.370	.519	.060	.163	.129	.607
⑥養護者に対して，家族の会話形態や行動で変容して欲しいと思うことを聞いた（トラッキング）	.398	.303	.508	.058	.046	−.002	.493
①養護者・高齢者・家族成員にとって問題解決状態とはいかなる状況を示すのかを確かめた（ミラクルクエスチョン）	.123	.146	.085	.769	.122	.114	.662
②問題解決状態を目指すためにどのような資源や対処をしたらよいのかを養護者・高齢者・その他の家族成員とともに考えた（スケーリングクエスチョン）	.130	.365	.252	.653	−.027	−.087	.648
①養護者の原家族の価値観が現在の価値観に影響していることを理解させた	.118	.265	.227	.052	.682	−.031	.605
②養護者と情緒的に過度に密着がある家族成員と，適切な情緒的距離をとる方法をともに考えた	.104	.232	.208	.092	.667	.029	.563
①養護者やその他の家族成員がこれまで行ってきた介護に対して，賞賛した（コンプリメント）	.391	.051	.196	.362	.186	.506	.615
因子寄与率（累積因子寄与率：61.202％）	27.115	11.080	9.454	5.455	4.994	3.103	

因子抽出法：主因子法，回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		.869
Bartlett の球面性検定	近似カイ２乗	2555.337
	自由度	595
	有意確率	.000

表2　社会福祉士の介入後にみられた，家族システム内特性の改善の因子分析結果

社会福祉士の介入によってみられた家族システム内特性の改善点	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	共通性
①高齢者と虐待する養護者のコミュニケーションパターンの改善	.849	.079	.084	.264	.804
②虐待する養護者の感情表出に対する家族成員の情緒的支持の改善	.752	.185	.196	.191	.674
③家族成員間のコミュニケーションパターンの改善	.748	.149	.222	.296	.718
④虐待する養護者が育った家族における価値観に縛られる様子の改善	.670	.057	－.056	－.039	.456
⑤虐待する養護者と高齢者の過度な情緒的結びつきの改善	.608	.268	－.128	.110	.470
⑥介護の意思決定に対する家族成員間の勢力関係の改善	.557	－.108	.213	.152	.391
⑦虐待する養護者の，虐待をしていることに対する認知の改善	.528	.286	.196	－.234	.454
①虐待する養護者以外の家族成員の，虐待に対する認知の改善	.109	.890	.124	－.054	.823
②虐待発生原因についての家族成員の共有認識度の改善	.145	.884	.207	.001	.846
③介護に対する家族のまとまり具合の改善	.106	.769	.241	.267	.732
④高齢者の，虐待を受けていることに対する認知の改善	.090	.552	－.192	.234	.404
⑤家族内（親族含む）の介護役割配分状況の改善	.179	.527	.138	.476	.556
①介護家族の公的サービスの利用状況の改善	.097	.069	.871	.087	.780
②公的サービスや援助職の介入への家族成員の抵抗感の改善	.156	.213	.808	－.018	.723
①虐待する養護者の自由時間保持や外出に対する家族成員の手段的支持の改善	.304	.190	.023	.619	.511
因子寄与率（累積因子寄与率：62.287％）	23.088	20.437	11.882	6.880	

因子抽出法；主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		.693
Bartlett の球面性検定	近似カイ２乗	401.991
	自由度	105
	有意確率	.000

利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子と命名した（α = .794）.

第４因子は，「虐待する養護者の自由時間保持や外出に対する家族成員の手段的支持の改善」であった.

各因子を構成する項目の平均スコアは，①第３因子『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子（平均スコア 3.19），②第２因子『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子（平均スコア 2.62），③第１因子『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子（平均スコア 2.45），④第４因子「虐待する養護者の自由時間保持や外出に対する家族成員の手段的支持の改善」（平均スコア 2.16）であった．平均スコアの結果より，公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感がもっとも改善していることが明らかとなった.

３）社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルと家族システム内特性の改善との関係

社会福祉士が介入した後の家族システム内特性の改善に対して社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキルがいかなる影響を及ぼしているのかを明らかにするために，家族システム内特性の改善に関する４因子，社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキル６因子との相関分析を行った（表３参照）．さらに，相関関係分析の結果をもとに，家族システム内特性の改善に関する４因子を従属変数，社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキル６因子を独立変数とした重回帰分析を行った（表４－１～表４－３参照）.

まず，相関分析の結果から，家族システム内特性の改善の第１因子である『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子に対して，正の相関があったソーシャルワーク実践スキルは，『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』，『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』，『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』，『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』，「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して，賞賛した」であった．家族システム内特性の改善の第２因子である『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子に対して正の相関があったソーシャルワーク実践スキルは，『相互作用パタ

ーンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』,『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』,『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』,『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』であった．家族システム内特性の改善の第３因子である『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子に対して正の相関があったソーシャルワーク実践スキルは,『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』,『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』,「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して，賞賛した」であった．家族システム内特性の改善の第４因子である「虐待する養護者の自由時間保持や外出に対する家族成員の手段的支持の改善」に対して正の相関があったソーシャルワーク実践スキルは,『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』,『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』であった．

次に，相関関係分析の結果，家族システム内特性の改善に関する４因子と正の相関があったソーシャルワーク実践スキルを重回帰分析にかけた．まず，家族システム内特性の改善の第１因子である『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子を従属変数，正の相関関係がみられたソーシャルワーク実践スキルである『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』・『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』・『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』・『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』・「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して，賞賛した」を独立変数とした重回帰分析の結果,『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』が有意な正の規定力を示した．

家族システム内特性の改善の第２因子である『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子を従属変数，正の相関関係がみられたソーシャルワーク実践スキルである『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』・『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』・『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』・『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』を独立変数とした重回帰分析の結果,『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』が有意な正の規定力を示した．

家族システム内特性の改善の第３因子である『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子を従属変数，正の相関関係がみられたソーシャルワーク実践スキルである『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』・『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』・「虐待する養護者や家族成員が行ってきた介護に対して，賞賛した」を独立変数とした重回帰分析を行った結果,『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』と『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』が正の規定力を示した．

家族システム内特性の第４因子である「虐待する養護者の自由時間保持や外出に対する家族成員の手段的支持の改善」を従属変数，正の相関関係がみられたソーシャルワーク実践スキルである『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』・『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』を独立変数とした重回帰分析を行った結果，有意な規定力を示す独立変数はみられなかった．

これらの結果より,『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』は,『高齢者と養護者の交流パターンの改善』や『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』や『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』につながるソーシャルワーク実践スキルであることが明らかとなった．虐待する養護者の感情表出に対する家族成員の情緒的、手段的支持に対する，このソーシャルワーク実践スキルの効果以外の仮説は検証されたといえる．

また,『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』は,『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』につながるソーシャルワーク実践スキルであることが明らかとなった．

４．結論

本稿における主な目的は，家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能や構造の変容に対して，社会福祉士が活用する効果的なソーシャルワーク実践スキルを明らかにすることであった．家族システム内機能や構造の変容に効果的な社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルを明らかにするために，社会福祉士が介入した後の家族システム内特性の改善を従属変数，社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキルを独立変数とする重回

帰分析を行った．その結果，『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』は，『高齢者と養護者の交流パターンの改善』や『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』や『公的サービスや援助職による援助に対する抵抗感の改善』につながるソーシャルワーク実践スキルであることが明らかとなった．

相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するソーシャルワーク実践スキルや，養護者を情緒的に支持していくソーシャルワーク実践スキルは，家族成員間の相互作用パターンや，虐待原因に対する家族成員の認識共有度，家族内の凝集性や適応性の改善，公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善などにつながることがわかった．高齢者虐待発生を抑制するには，高齢者に対する介護支援サービスの利用促進と並行して，家族システムズアプローチに基づいたファミリーソーシャルワークを実践することも必要であるといえる．

表3　社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキルと、社会福祉士の介入後における家族システム内特性の改善との相関分析結果

	社会福祉士が活用するソーシャルワーク実践スキル						
家族システム内特性の改善		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
	第1因子	.305**	.446**	.498**	.188	.328**	.287**
	第2因子	.092	.337**	.479**	.228*	.194*	.147
	第3因子	.321**	.218	.328**	.181	.141	.243*
	第4因子	.158	.302**	.345**	.146	.185	.112

$p^{**} < .005$　$p^{*} < .05$

表4－1　『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子の規定要因分析（重回帰分析）

独立変数（社会福祉士の活用するソーシャルワーク実践スキル）	標準化係数（β）	有意確率
『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』因子	.291	.020
『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』因子	.156	.220
『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』因子	.025	.820
『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』因子	.138	.187
「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して、賞賛した」	.082	.413
R	.546	.000
R2乗	.298	

強制投入法　従属変数：『高齢者と養護者の交流パターンの改善』因子

表4－2　『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子の規定要因分析（重回帰分析）

独立変数（社会福祉士の活用するソーシャルワーク実践スキル）	標準化係数（β）	有意確率
『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』因子	.458	.000
『虐待原因として虐待する養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』因子	.088	.486
『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』因子	.049	.632
『虐待する養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』因子	－.107	.329
R	.493	.000
R2乗	.243	

強制投入法　従属変数：『家族の虐待に対する認知的評価や家族凝集性の改善』因子

表4－3　『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子の規定要因分析（重回帰分析）

独立変数（社会福祉士の活用するソーシャルワーク実践スキル）	標準化係数（β）	有意確率
『虐待する養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』因子	.231	.034
『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』因子	.215	.042
「虐待する養護者や家族成員がこれまで行ってきた介護に対して、賞賛した」	.068	.519
R	.413	.000
R2乗	.170	

強制投入法　従属変数：『公的サービスの利用促進や援助職による援助に対する抵抗感の改善』因子

＊本研究は，平成 19 ～ 20 年度文部科学省科学研究費補助金若手研究Ｂ（課題番号　19730377）を受諾して実施した『高齢者虐待事例における家族内構造の変容に効果的なソーシャルワーク実践スキルの探索』の一部である．

〔引用文献〕

1）読売新聞，2013.1.23.
2）有馬良建，2004，介護専門職における虐待防止とその効果について，月刊総合ケア，14（3），47-49.
3）加藤悦子，2001，高齢者虐待への福祉的介入・援助の有効性と限界―愛知県下の在宅事例の現状を手がかりに，社会福祉学，41（2），131-141.
4）金子善彦，2005，高齢者虐待と家族―高齢者本人へのアンケート調査と家族関係危険因子評価表について―，老年精神医学雑誌，16（2），194-204.
5）大塩まゆみ，2003，在宅高齢者虐待の発見と対応―介護者の負担への視点をどう強化していくか，生活教育，47（11），7-13.
6）小野ミツ・高崎絹子・佐々木明子・小林亜由美・板井修一，2000，都市部と郡部における在宅要介護高齢者虐待の比較検討―福岡県における実態調査と追跡調査から , 高齢者のケアと行動科学，7（2），53-61.
7）高崎絹子，2005，高齢者虐待への対応の現状と課題，老年精神医学雑誌，16（2），212-218.
8）高崎絹子・小野ミツ，2005，高齢者虐待の実態と家族支援の視点，保健の科学，47（2），117-124.
9）高橋美岐子・大泉哲子・藤沢緑子・佐藤沙織・佐藤怜，2000，高齢者虐待問題と専門職の課題に関する考察 , 日本赤十字秋田短期大学紀要，5，1-10.
10）津村智恵子，2003，在宅高齢者虐待の早期対応と保健活動―潜在因子と兆候にどう対応するか , 生活教育，47（11）,14-19.
11）津村智恵子，2001，介護保険制度下における高齢者虐待への早期対処策 , 日本在宅ケア学会誌，5（1），5-8.
12）マイケル・E・カー，マレー・ボーエン著，藤縄昭・福山和女監訳，2002，家族評価～ボーエンによる家族探究の旅，金剛出版 .
13）一瀬貴子，2007，虐待が発生している家族集団の家族機能的適応能力と虐待発生頻度との関連, 関西福祉大学研究紀要，10，169 － 177.
14）井上眞理子，2005，ファミリー・バイオレンス～子ども虐待発生のメカニズム，92-100，晃洋書房 .
15）社団法人日本社会福祉士会虐待対応ソーシャルワークモデル研究会監修，2008，地域の高齢者虐待対応におけるソーシャルワークアプローチに関する調査研究並びに研修プログラムの構築事業報告書 .
16）一瀬貴子，2009，家庭内高齢者虐待事例に対する社会福祉士のソーシャルワーク実践スキル構造―家族システム内機能・構造変容を目指したソーシャルワーク実践スキルを中心に―，関西福祉大学社会福祉学部研究紀要，12，71 － 80.
17）O'hara,T.,Collins,P & Walsh,T，1998，Validation of the Practice Skills Inventory with experienced clinical social workers, Research on Social Work Practice ，8（5），552 － 563.
18）福島喜代子，2005，ソーシャルワーク実践スキルの実証的研究－精神障害者の生活支援に焦点をあてて－，筒井書房 .

〔参考文献〕

1）一瀬貴子，2013，高齢者虐待対応専門職としての社会福祉士の『専門職性自己評価』に対するアイデアルイメージと実践的意識との比較，関西福祉大学社会福祉学部研究紀要，16（2），19 － 28.
2）一瀬貴子，2009，高齢者虐待事例における家族内構造の変容に効果的なソーシャルワーク実践スキルの探索，平成 19 ～ 20 年度文部省科学研究費補助金若手研究Ｂ研究成果報告書.